

正義の学び

——プラトン『ゴルギアス』篇 459c6-461b2——

野 村 光 義

小論の目的は『ゴルギアス』篇第一部において、正義がどのようなものであるとされているかを明らかにすることである。

弁論家ゴルギアスを対話相手とする『ゴルギアス』篇第一部は、その結尾においてゴルギアスがソクラテスによって論駁されるが、その際、ゴルギアスが承認する、

- (I) 正しいことを学んだひとは正しいひとである
- (II) 正しいひとは正しいことをする

という命題は、正義という徳についての「徳は知である」という主張を含意していると思われる。この「徳は知である」という主張は「ソクラテスの主知主義」と呼ばれ、アリストテレス以来「ソクラテスの教説」とみなされているものであるが¹、それはまた「ソクラテスのパラドクス」とも

1 アリストテレス『ニコマコス倫理学』第六巻1144b18-21、「アクラシア」を論ずる第七巻の1145b23-27、および『エウデモス倫理学』第一巻1216b3-25を参照。特に『エウデモス倫理学』の記述は明らかに『ゴルギアス』篇のこの箇所を念頭においたものである。

当該箇所を廻る議論としては、E. R. Dodds, *Plato: Gorgias*, Oxford U. P., 1959, T. Irwin, *Plato: Gorgias*, Oxford U. P., 1979, Ch. H. Kahn, 'Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*', in *Oxford Studies in Ancient Philosophy* I, 1983 (pp. 75-121), 村上学「こころと思慮」九州大学における博士論文、1998/9 が批判的であり、他方、出村和彦「ソクラテスの正義の知識——*Gorgias* 460a-c——」東京都立大学哲学会『哲学誌』28, 1986 (pp. 89-110), 吉田雅章「正義と知——プラトン『ゴルギアス』篇第一部の問題——」森俊洋, 中畑正志編『プラトン的探究』九州大学出版会、1993 (pp. 43-60) が肯定的である。

呼ばれることがあることからも明らかのように、われわれの常識（エンドクサ）に反するようにみえる。このパラドクシカルな側面は、これら（I）、（II）の命題で、いわば「中項」をなすと言える「正しいひと」を「カット」し、「小項」と「大項」を直接結びつけ、

（III）正しいことを学んだひとは正しいことをする

という命題に変換することによって起こってくるように思われる。なぜなら、こうするとき、命題（III）は「知」と「行為」を直接結びつける関係として解釈され、いわゆる「ソクラテスの主知主義」のパラドクス性は顕著になってくるからである。つまり、「正しいことを知っているからといって、ひとがつねに正しいことをするとはかぎらない」という常識に命題（III）は反するのである。この命題（III）は、アリストテレスにより「アクラシア」の問題として主題化されることによって、西洋哲学史上、今日に到るまで中心問題とされてきたのである。

しかし、ソクラテス、プラトンはこのような常識に反する命題（III）をその哲学の中心に据えていたのだろうか。わたくしが小論において試みるのは、「正しいことを学ぶこと」、「正義の知²」が『ゴルギアス』篇においてどのようなものとして問題化されていたかを、対話篇第一部のゴルギアスとソクラテスの対話問答の場面のテクストを読み解くことを通じて、明るみに出すことである。

さて、『ゴルギアス』篇のテクストに向かうとき、われわれはそこで「正義の知」がひとの「ありかた」との関係で問題にされているということに気付く。正義の知は何よりもひとの「ありかた」を「きめる」、もしくは「作り上げる ($\alpha\pi\epsilon\rho\gamma\alpha\zeta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$)」ものとして取り上げられているのである。知はただひとの行為をきめるものではない。したがって「正義の知」

2 じつはこの「正義の知」という表現は二義的である。格助詞「の」を同格にとって「正義という知」と読むか、目的格にとって「正義を知る知」と読むか、二通りの読みが考えられる。すなわち、「正義」は知を意味するとともに、知の対象も意味するのである。これは「医術」の対象が「医術」とは別の「健康」という語で特定されるのと大きな相違であり、「正義」の循環しない定義が困難なことの一因になっていると考えられる。わたくしは、この表現を同格の意味で用いている。

は単なる「正しい行為の知」なのではない。それゆえ、ひとの「ありかた」をはずして、「正しいことを学んだひとは正しいことをする」(Ⅲ) というように、「知」と「行為」を直接結び付ける命題でソクラテスの主知主義をとらえるのは不適切である。個別の行為が正しいか否かの知ではなく、ひとのありかたをきめるものとして正義の知が考えられているのである。このようなものとしてソクラテスにおける「知」のありかたを理解するとき、いわゆる「ソクラテスの主知主義」と言われるものとのパラドクシカルな面は大幅に解消されると思われる³。

そこで小論の論考は以下のように進められる。すなわち、第一節において、第一部最終部分までの文脈を確認する。つぎに第二節において、正義の知がそれをもつひとを正しいひとに作り上げるという主張を補強する議論をおこなう。この主張はひとを作り上げる知の名前と作り上げられるひとに対する述語との「同名性」によって支えられているということを示し、この意味では正義の知がいわゆる技術知と異なるものとして扱われていることを示す。さらに第三節において、しかし、正義の知が技術知と同種のものになるわけではないことを、「正しいひとは正しいことをする」(Ⅱ) という命題を検討し、正義の知を技術知と「対比」することによって示す。以上の作業によって、「正義の知」が、『ゴルギアス』篇の冒頭をなす第一部でどのようなものとして提示されているかを明らかにする。

1. 正義の教授の同意について

本節において、第一部最終部分までの文脈を確認する。『ゴルギアス』篇第一部の筋を簡単に述べると、以下のようになる。

『ゴルギアス』篇は、「ゴルギアスのもつ技術の力が何であるのか」(447c1-2⁴) というソクラテスの問いに端を発し、かれのもつものが「弁論術」(449a5) という名で特定され、かれが「弁論家」(449a6) という名

3 あるひとびとにとっては逆のようである。後のカーンに対するわたくしの診断を参照。

4 『ゴルギアス』篇からの引用は書名を省略するものとする。

で特定される。そこで「弁論術」の何であるかが議論されるのだが、周知のように、弁論術は「言論に関わる技術」(449e1) であるとされ、さらに「説得をつくりだすもの」(452e1) であると限定される。つぎに、その説得が「何についての説得であるか」(454a8-9) という問い合わせを承けて、「法廷やその他の集まりにおける、正不正についての説得」(454b5-7) であるとゴルギアスは答える。そしてまた、知をもたらす説得（「教授」）と知なしの信をもたらす説得（「狭義の説得」）という二種の説得をソクラテスは区別したうえで、たとえば法廷において弁論家のおこなう説得が後者のタイプの説得であることをゴルギアスに認めさせる。そこで、ソクラテスは「ポリスの集会において、雇う医者の選考をする場合」に考察の場面を移すが、ゴルギアスは医術を知らないひとびとが選考する場合、選ばれるのは本当の医者ではなく弁論家であると主張する(455b2-456c7)。それに加えて、弁論家はひとを弁論家にすることができるが、弁論家になったそのひとが弁論術を不正に使用したとしても、教えた者を責めることはできないとゴルギアスは主張する(456c7-457c3)。そこで、ソクラテスは「弁論家になった者が弁論術を不正に使用する」という言明に照準を合わせ、ゴルギアスをアポリアに陥らせるため、弁論術を学ぶには「正不正」を知っている必要があることをゴルギアスに認めさせる。そして、この命題に、われわれの主題である命題（I）「正しいことを学んだひとは正しいひとである」と命題（II）「正しいひとは正しいことをするひとである」を加えて、「弁論家（弁論術を学んだ者）は正しいことをする」という帰結を引きだす。しかるに、この帰結は「弁論家になった者が弁論術を不正に使用することがある（=不正なことをすることがある）」というゴルギアスの主張と齟齬をきたし、ゴルギアスはアポリアに陥る。そして、ポロスが対話相手を引き継ぎ、『ゴルギアス』篇は第二部に移るのである。

以上がおおまかな流れであるが、弁論家の仕事には大きくわけてふたつの種類がある。ひとつは、弁論術を使ってひとびとを説得すること（「術の行使」）であり、もうひとつは弁論術を弟子に教えること（「術の教授」）である。このうち、技術者の本分は「術の行使」のほうであるとされるだろうが、弁論家やソフィストにおいては「術の教授」も重要な仕事である。そして、ゴルギアスをアポリアに陥らせるべくソクラテスが着目するのも、

「教授」の仕事のほうであり、しかも弁論術そのものの教授ではなく、それに付帯する「正不正」の教授なのである。

さて、「正不正」は技術知に関わることと異なり、弁論術をもっていれば「正不正」を知らなくてもよいということがらではないとされる。当のゴルギアスも自分が「正不正」を知らないとは思っておらず、教授の仕事の場面でも、弟子に弁論術を教える際には、弟子が「正不正」を知らないならば弁論家が教えるのであり、弟子は「正不正」を知らなくてはならないという同意をゴルギアスはするのである。この同意はゴルギアスの他の同意から導出されるものではなく、ゴルギアスがアポリアに陥る原因だと後にポロスが主張するものである (461b3-c4)。したがって、弁論家が弁論家として必然的に「正不正」を知らなければならぬのではなく、ゴルギアスが正不正を知っており、弟子に教えることができると思っているゆえの同意なのである。論者たちは、ここでの同意が彼の本意ではないと指摘したり、『メノン』篇における、「自分は徳を教えない」 (『メノン』篇 95c2-5) というゴルギアスの見解と矛盾すると指摘したりするが (カーン, pp. 80-1), ことがらとして問題なのは、ゴルギアスの同意が「自分は正義を教えることができる」ということにとどまらず、「弁論術を学ぼうとする者は正義を知っていなければならぬ」ということに到っていることである。すなわち、ソクラテスの問い合わせに対してゴルギアスは「正不正を知らないならば、それらもわたしから学ぶことになる ($\mu\alpha\theta\eta\sigma\epsilon\tau\alpha\iota$)」 (460a3-4) と答えるが、直後の460a5-b1においては「弁論術を学ぼうとするひとは正不正を知らなくてはならない ($\grave{\alpha}ν\acute{\alpha}\gamma\kappa\eta$)」という必然様相つきの命題を自分で認めるのである。ソクラテスと異なり、「正不正を知っていること」の難しさをゴルギアスは全くわかっておらず、またこの段階では、正不正を学んだとしても不正な行為をすることが可能であるとかれが考へているのは明らかである。

2. 正義の学びの意味

さて、ソクラテスが以上の同意に着目したのは、弁論術を学んだ弟子が

弁論術を不正使用することがあるとゴルギアスが主張したからであった。それゆえソクラテスは「弁論術を学んだ弁論家は不正なことをしない」ということをゴルギアスに認めさせるために対話問答をなすのである。その第一歩が「正しいことを学んだひとは正しいひとである」(I) という命題をゴルギアスに認めさせることである。この命題は正義の「知」としての側面をあますところなく描き出していると思われる。それではその検討に入ることにしよう。

まずソクラテスが問題の「正しいことを学んだひとは正しいひとである」(I) という命題をゴルギアスに認めさせる箇所の訳を掲げることにする(460b1-7)。

「大工に関することども (*τὰ τεκτονικά*) を学んだひとは大工 (*τεκτονικός*) であるのだね」「そうだ」

「それではまた音楽に関することども (*τὰ μουσικά*) を学んだひとは音楽家 (*μουσικός*) であるのだね」「そうだ」

「また医術に関することども (*τὰ ιατρικά*) を学んだひとは医者 (*ιατρικός*) であるのだね。そして同じ論法によって他のことどもも同様であって、[ある知に関する] それぞれのことどもを学んだひとは、その知 (*ἐπιστήμη*) がそれぞれのひとをかくかくしかじかのひとに作り上げる (*ἀπεργάζεσθαι*) ような、そのようなひと (*τοιοῦτος ... οἶον*) であるのだね」「そのとおり」

「するとこの論法によってまた正しいことども [正義に関することども] (*τὰ δίκαια⁵*) を学んだひとは正しいひと (*δίκαιος*) であるのだね」「まったくもってそのとおり」

「正しいことを学んだひとは正しいひとである」(I) を導く過程はごく単純なものである。それは、「大工術」、「音楽術」、「医術」という三つの技

⁵ 今まで「正しいこと」は「不正なこと」と対となって「正不正」として用いられてきたが、ここでは「大工術-大工に関すること」、「音楽術-音楽に関すること」、「医術-医術に関すること」との類比であるので、「正義」の知については「正しいこと (正義に関すること)」のみが用いられるのである。

術知から一般形命題を「帰納」し、その一般形命題から正義に関する命題を「演繹」しているようにみえる (cf. ドッズ, p. 219). しかし、そのときの一般形命題を三つの具体例から「技術知」一般の命題と解し、正義を技術知のひとつとみなす議論であると解することは誤りである。なぜなら、ここでは技術知であれ正義であれ、ひとがそれを「学ぶ」もしくは「知る」という局面、一般形命題中の表現で言えば、それが「知 (*ἐπιστήμη*)」であるという局面が問題にされているからである。

ここでの主張を明らかにするため、三つの具体例のうち医術を代表例として取り上げ、それと一般形を比較検討してみよう。一般形には「知がそれぞれのひと [= 知に関することどもを学んだひと] をかくかくしかじかのひとに作り上げる」という表現が見られる。具体例にはそのような表現が見られないでそれを補って考察してみよう。そうすることによって、ソクラテスの意図が明らかになると思われるからである。

さて、「医術に関することどもを学んだひとは医者である」という具体例において「何という知がどのようなひとに作り上げるのか」を考えれば、もちろん「知」は「医術 (*ἰατρική*)」であり、作り上げられるひとの「ありかた」は「医者 (*ἰατρικός*)」である。すなわち、

医術 (*ἰατρική*) という知はひとを医者 (*ἰατρικός*) に作り上げる

ということになる。このように知の具体例を代入すると、「何という知がどのようなひとに作り上げるのか」における「同名性」が明らかになる。両者はそれぞれ、形容詞 *ἰατρικός*, -ή, -όν の女性单数形と男性单数形なのである。通常「医者」には名詞 *ἰατρός* が使われるが、ここでは同名性を強調するために形容詞男性形 *ἰατρικός* が使われているのである。

本来問題であった「正義」の場合も同様で、「何という知がどのようなひとに作り上げるのか」と言えば、

正義 (*δικαιοσύνη*⁶) の知はひとを正しいひと (*δίκαιος*) に作り上げる

⁶ *δικαιοσύνη* は形容詞 *δίκαιος*, -α, -ον の女性形ではないが、同族語であるので、「同名」と言えよう。

ということになる⁷。知はひとのありかたを作り上げるものとして考えられており、正義によって作り上げられるひとのありかたとは「正しい」というありかたであり、知とひとのありかたの「同名性」が見られる。そこでこの命題の意味を明らかにするため、「作り上げる」ということに着目して、初期プラトンにおける徳と知の問題について若干の考察をしてみたい。

プラトンの初期対話篇における「作り上げる (ἐργάζεσθαι, ἀπεργάζεσθαι)」の用例のうち、その目的語となるもの、すなわち「作り上げられるもの」はほとんどの場合、「靴」や「健康」など広義の「もの」である。「ひと」が目的語の用例は当該箇所のほか、『カルミデス』篇 160e11, 161a8-9 に見られ、そこでは「思慮 (σωφροσύνη)」がそれをもつひとを「善きひと」に「作り上げる (ἀπεργάζεσθαι)」、「作る (ποιεῖν)」と言わわれている。また、思慮という徳がひとを善きひと、思慮あるひとに「作り上げる」のは、思慮がひとに「備わる (παραγίγεσθαι)」、「内在する (ἐνεῖναι)」、もしくは、ひとが思慮を「もつ (ἔχειν)」ことによってであり、そこでは思慮という徳の「知の側面」は登場しない。すなわち、一般的に言えば、徳は知でなくとも（あるいは徳の知という側面を出さなくても）ひとの「ありかた」をきめるのである⁸。他方、『ゴルギアス』篇において、「備わる」、「内在する」、「もつ」に相当するのは「学ぶ」であり、正義の徳は「知」として登場する。しかし、これらはふたつの異なった道なのではなく、同じ事態の別様の表現であると思われる。それではなぜ、プラトンは、徳が知であるとし、それを知る、学ぶことによって、徳あるひとになる、すなわちひとの「ありかた」がきまると考えたのであろうか。

それは言うまでもなく、『ソクラテスの弁明』篇の問題があったからである。『弁明』篇において、ソクラテスが「自分よりも知恵ある者 (σοφώτερον) はいない」(21a6-7) という神託をうけたとき、はじめから

7 わたくしは吉田の「我々は (3) [=「正しいことを学んだひとは正しいひとである」] の真実性について認めなければならないのではあるまいか。確かに、「何かを学び知ること」が人をそのような者として作り上げるものでないとしたら、我々にとって「学び知る」とは、一体何なのであろうか」(吉田, p. 58) という一節に導かれたと言える。また、出村, pp. 90-94, および、岩波文庫版『ゴルギアス』(加来彰俊訳) p. 256, n. 49 も参照。

8 もちろん『カルミデス』篇後半の「思慮」探究は、まさに「自己知」や「知の知」という「知の側面」の方向に進んでいくのである。

「知恵 (σοφία)」が問題であった。もちろんその知恵とは、ひと、もしくは魂の「ありかた」全体をきめるような知であった。というのも、この神託は、ソクラテスの「何者であるか」もしくは「どのような者であるか」を語っているからである。そしてまた、「知恵ある」とは医術や算術という技術知をもつことでなく、「善美なること (καλὸν κἀγαθόν) を知る」(21d4-5) ことであった⁹。ここで「徳」が「善」の同族語であることを考えあわせると、徳をもつということは、はじめから「知恵ある」もしくは「善美なることを知る」という「知」の形で問題だったことがわかるのである。そして、対話問答の場面で自分が徳をもっていることを対話相手に「示す」ために、その「何であるか」を言うこと (λόγον διδόναι) が、「知」の重要な要素となるとき、徳の知としての側面は不動のものとなるのである。

このように知がひとのありかたをきめるという考えにしたがえば、行為がひとのありかたをきめるとみなすこと、たとえば「正しい行為をするひとが正しいひとである」とみなすことは不適切であることがわかるだろう。直前の459d4-5において「何が善くて何が悪いか、何が美しくて何が醜いか、何が正しくて何が不正であるかを知」るという表現があり、それはそのような行為のリストを知ることのように見えるが、少なくともソクラテスにとって、それらは「善」、「美」、「正義」の「何であるか」の知を前提として成立するものであり、「何であるか」の知はまずもってそれをもつひとのありかたをきめるものなのである。同じくここでの「正しいことを学んだひと」という表現も単に正しい行為のリストを学ぶことではない。そうではなく、知がひとのありかたを作り上げ、その知もしくはひとのありかたが正しい行為をきめるという順序になっているのである。

技術知の場合も「ひとを作り上げる」という点では同様なのであるが、大きく異なることもある。それは、正義の知をもつ人間は（ソクラテスも含めて）ひとりもいないのに対して、技術知においては、それぞれの知をもつひとが現に存在して、たとえば「大工」、「音楽家」、「医者」というありかたを現に知が作り上げているということである。プラトンは、たとえ

⁹ 言うまでもなく、ソクラテスは「善美なること」を知らないのであった。

ば医者としてのありかたすべてを医術の知が支えていると考えているのである。これは理論知でも制作知でもかわりはない。この「技術知をもつひとが現に存在する」という事実が、正義について議論をする際に技術知の実例を持ち出す理由であり、既知のことがらから問題になっていることがらについての結論を導き出すのが「技術知との類比」のはたらきである。それは正義をいわゆる技術知のひとつとする議論ではない。技術知は、正義の知を措定し、その知こそ愛知の求める知だとするプラトン的（ソクラテス的）意味では知の典型でないが、知恵あるとされるひとのもつものをすべて「似非知」であると暴いていったというプラトン的（ソクラテス的）意味では現にひとがもっている唯一の知なのである。

以上のような「知」の見かたにしたがえば、正義の知は「同名性」によってそれを学んだひとを「正しいひと」に作り上げるのである。このような知の見かたのもとで、「正しいことを学んだひとは正しいひとである」という命題は「正義の知」の文法から出てくる「文法的命題」と言うことができよう。それは、形式的な議論によっているがゆえに、ある意味、非常に論駁困難なものである反面、正義の知や正しいひとの内実を語るという性質のものではないのである。しかし、ここでわれわれが正義の知の積極的な内実を補うことはとても難しいと思われる。なぜなら、前述のように、ひとは正義を含む徳の「何であるか」の不知、アポリアという現実に置かれているからである。ソクラテスの論駁にも負けない正義の知の内実は初期対話篇において見いだせないのでないだろうか¹⁰。

他方、「正しいことは善いことである¹¹」や「不正をするより不正をされるほうが善い¹²」という形式的な命題のみで正義の知の内実は十分だと考えるのも無理だと思われる。なぜなら、そうだとすると、ソクラテスがまったく「正しいひと」になってしまい、かれ自身のアポリアが意味を失

10 もちろんだからといって、「探究なんて不可能さ」と開き直っていいわけではない。否、まさに正義の「何であるか」は、対話篇がわれわれに「語れ」と迫ってくる問題なのである。

11 Cf. 470c2-3.

12 Cf. 475e3-6. これらは『ゴルギアス』篇第二部で「証明」されている命題であるが、これらのみで、正義の「何であるか」が十全に明らかになったのではない。また、第三部後半におけるソクラテスの「正義」についての論述については、稿を改めて、主題的に論じなければならぬ。

ってしまうからである。ソクラテスは本対話篇のゴルギアス、ポロス、カリクレスよりもすぐれていたとしても、断じて知の「終極」にいたのではないと思われる。

しかし、知の内実がしっかりと定まらないままの議論は無意味なのではないか、という疑問が生じるかもしれない。それは、対話篇内部の問題としては、ゴルギアスを論駁するのに寄与していると答えることができるが、他方、現代のわれわれにとっても有意味だということを現代の解釈者をとりあげることによって示そうと思う。たとえば、カーンは、この「正しいことを学んだひとは正しいひとである」(I) という命題が「自明な主張ではなく」、「ソクラテスのパラドクスの強いヴァージョンである」と言い、当該箇所におけるソクラテスの議論を「驚くほど弱い」と批判する解釈者たち(ドッズ、アーウィン)が「ただしい」としている(カーン, p. 82¹³)。かれにとっては、「正義の知」が「ひとのありかた」と密接に関係することが、通常の「ソクラテスのパラドクス」のように行為と密接に関係することよりもいっそうパラドクシカルなのである。ここにカーンの正義の知の理解があらわれている。かれは「正しいこと」を「正しい行為」と理解しており、それを学んでも「正しいひと」に到達するにはまだ足りないと考えているのである。それと連動するのであるが、かれは「ひとを作り上げる」というモメントに全く触れていないのである。わたくしに言わせれば、この箇所はここからソクラテス、プラトンの考える「知」を理解することを要求しているのであるが、その反面、カーンのような異議が出るということ自体が、この命題を主張することが現代においても意味をもつことの証拠になっているとも言えるのではないだろうか。

また、対話篇においてソクラテスおよびゴルギアスがこの命題を「文法的命題」と解しているということは、これを導く議論が「驚くほど弱い」ことの説明になっていると考えられる。というのも、それを「文法的命題」と解するひとにとって、「同名性」に基づいた議論は、なにか別の議論を構成するまでもなく、それ自体「強い」議論だからである。事実、この命

13 ただしカーン自身は、この命題はすでに直前の箇所(459e5-6)において含意されているから、ここでゴルギアスが当該命題を認めないとても結局、かれはアポリアから逃れることができない、と解している(カーン, p. 82)。

題は、後の対話相手である、ポロス、カリクレスによっても否定されておらず、その意味で『ゴルギアス』篇全体に横たわる「根本命題」であると言いうことができる。他方、次に見る「正しいひとは正しいことをするひとである」(Ⅱ)、「正しいひとは正しいことをすることを望む」のうち、特に後者の命題はポロスとの対話問答において(467c5-468e5)、その「望むこと」の意味を廻って議論の俎上にのぼるのである。

3. 正しいひとと正しい行為について

ゴルギアスの「弁論術の不正使用」の主張の論駁を構成する第二の命題の検討に移ろう。ソクラテスは以下のことをゴルギアスに認めさせる。その訳を掲げることにする(460b8-c2)。

「しかるに正しいひとは正しいことをするひとであるのだね」「そうだ」「[以上のことどもから¹⁴] すると弁論家は正しいひとであり、正しいひとは正しいことをすることを望む(βούλεσθαι) ということが必然なのではないか」「少なくともそう思われる」

はじめの「正しいひとは正しいことをするひとである」(Ⅱ)という命題は、「正しいひと」というひとの「ありかた」を「正しいこと」というひとの「行為」と結びつけるものであり、ふたつ目(の後半)はひとの「ありかた」をひとの「望むこと」と結びつけるものである。もちろん、「正義とは何であるか」もしくはもっと常識的に「どのような行為が正しい行為であるか」がきまらないと、このような命題はそれだけでは、実質的な意味をもたないということになってしまいそうである。たしかにそうなのだが、しかし、これらは本対話篇において、ゴルギアスの主張の論駁に実

14 「以上のことどもから」を補ったのは、この命題がここに掲げた直前の一文からだけではなく、「弁論家は正しいことを知っている」、「正しいことを知っているひとは正しいひとである」、「正しいひとは正しいことをするひとである」という三命題から帰結することを明示したかったからである。

際に寄与し、しかも正義についていくらかのことを語っているのである。それは、前節のように正義と技術知を「類比」するのではなく、「不正使用」という観点から両者を「対比」することによって明らかになるのである。

さて、ゴルギアスは弁論術の教師としての弁論家を擁護するために、弁論術を教わった弟子が弁論術を不正に使用したとしても、教えた弁論家が悪いのではなく、不正に使用した弟子が悪いと主張し、それは拳闘術の場合と同様であると主張していた (456c8-457a4, cf. 460c7-d6)。ここで重要なのは、教師にほんとうに責任がないかではなく、拳闘術等の技術知を不正に使用することがあるということである。

他方、『ゴルギアス』篇第二部における技術知の規定によれば、技術知とは最善を目指すものである¹⁵ (464c4)。「医術」、「体育術」は身体の善（「健康」や「力強さ」、「(身体の) 美」）を目指し、前述の拳闘術も体育術の一部をなす¹⁶。この意味で技術知はいわゆる「価値中立」なものではない。すると、これらの技術知を不正に使用する場合には、身体の善を目指しながら、不正な行為をすることになる。このとき、その行為全体の評価は、身体の善ゆえに善いものになるのではなく、不正ゆえに悪いものになる。第一部の対話相手ゴルギアスは、不正使用の責任を語るところから考えても、少なくとも表面上は行為全体を悪いと認めていることは明らかである¹⁷。また、健康、力強さ等の獲得や使用に際して、それが正しいときには善い行為であり、不正なときには悪い行為であることは『メノン』篇 78d3-7, 88a4-5においても言われていることである。つまり、技術知の不正使用は、その技術知が善を目指すにもかかわらず、悪いのである。これは、技術知の対象である健康等の善が正義の知の対象である正義に比べて、

15 ここでは「正義」も技術知であるとされているが、それは通常われわれの使う「技術知」という語よりも広い意味において使われていると考えるのが適当であるので、正義と技術知の対比の都合上、魂の善を目指す「正義」に対して、身体の善を目指す「医術」、「体育術」を「技術知」と呼ぶことにする。

16 それは、拳闘術の教師が体育教師であり (456e1), 体育教師が医者と併置される箇所 (504a4) があることからうかがえる。

17 第二部に入ると、対話相手ポロスが正しい行為と〔自分自身にとって〕善い行為の乖離を主張し、ソクラテスは必死にその主張を論駁する。このような「正義」と「善」の関係は、第二部、ひいては『ゴルギアス』篇全体の主題である。

善さに関して、まったくなきに等しいことを意味する (cf. 512d2-8). その理由をひとことで言えば、魂の善が身体の善に対して超絶しているからである。したがって、不正使用のできる技術知は端的に善いものであるとはいえず、技術知をもつひとはそれをもつだけでは端的に善いひとであるとはいえないものである。

それに対して、正義の知の場合はもちろん次のようになる。すなわち、正義の知をもつ正しいひとは正しいことをするのであるから、正義の知の不正使用などなく、不正という悪を完全に免れているがゆえに、正義の知は端的に善いもので、正しいひとは端的に善いひとであるといえる。言い換えると、正義の知はそれをもつひとを「正しいひと」に作り上げるのと同時に「善いひと」にも作り上げるのである。

以上のように、不正使用ができるか否かという行為の相違と知の対象の相違から、正義の知と技術知の対比を描き出してみた。ところで、正義の知が技術知と異なり、その知をもつ正しいひとが正しいことをし、不正なことをしない理由は、後半の命題、

(IV) 正しいひとは正しいことをすることを望む ($\betaούλεσθαι$)

に求められる。この命題は、多少言い換えられ、第二部において「ひとは善いことを望む」(468c5) という、「証明」の結論の形で、さらに第三部で「誰も不正をすることを望まない」(509e5-6) という回想の形で登場することから、「正義」、「善」はひとが望むものであり、逆に「不正」、「悪」はひとが望まないものである。正しいひとは、正しいことを望み、しかもそれが正しいと知っているのだから、正しいことをするのであり、逆に不正なことを望まず、しかもそれが不正なことだと知っているのだから、不正なことをしないのである¹⁸。このように技術知をもつひとと正義等の徳

18 正しいひとが正しいことを望み、不正なことを望まないとしても、たとえば快に負けて、正しいことができない可能性があるのではないか、という疑問には以下のように答えられよう。すなわち、ここで「望む」は行為を動機づけるのものとして登場しており、「望む対象」と「正義」、「善」とは双条件法の関係にある。よって、たとえば快が行為を動機づけるものになるとすると、それは「善いもの」でなければならない。そして、第三部におけるカリクレスとの対話問答はまさに「快=善」という快楽主義を認めるか、否かを廻って、繰り広げられるのである、と。

の知をもつひとには、「どのようなひとであるか」や「どのような行為をするか」という点で大きな違いがあると考えられるのである。

ところがゴルギアスは、弁論術を学ぶ者は正義を学んでいなくてはならないということに同意していた。それらの同意に「正しいひとは正しいことをするひとである」という同意が加わると、ゴルギアスの主張していた「弁論術を学んだ生徒がそれを不正に使うことがある」ということは不可能なことになるのである。われわれの考察での区別で言えば、ゴルギアスは弁論術を徳の知と同じようなものではなく、技術知と同じようなものとみなしていたのである。ゴルギアスの主張するように弁論術を学んだひとは必然的に正義を学んでいなければならぬにしても、弁論術の機能を「説得」としてみるかぎり、弁論術は正義の知そのものではなく、不正なことをすることも可能であろう。むしろ、ゴルギアスにとっては、正しいことであれ不正なことであれ、どんなことでも説得できるということが弁論術の「セールスポイント」だった。しかし、ことが弁論術から正しいひとのもつ「正義の知」になると、ゴルギアスのように考えるわけにはいかない。弁論家は弁論家であるかぎりにおいては不正なことができるとしても、弁論家が必然的に正しいひとであるならば、かれが正しいひとであるかぎりにおいて、不正なことができない。だれかに不正なことをするよう説得することが不正なことであるならば、弁論家はそれを説得できないし、報酬を払わなきことが不正なことであるならば、弁論家はそれもできないことになる。

ゴルギアスをアポリアに導くために説得としての弁論術から正義の知へと場面を移すのは、このように正義のありかたによるのである。実際のところ、吟味され、矛盾があるとされたのは、ゴルギアスの弁論術理解¹⁹というよりはむしろ正義理解だったのである。正義の知は他の技術知と同じようにひとを作り上げる。正義の知の場合には正しいひとに作り上げる。これによって、ひとが弁論家から正義を学ぶならば、正義を学んだひとは

19 周知のように、第二部においてソクラテスは、弁論術が技術知でなく、「迎合（κολακεία）」であると主張する（463a6-c7）。

正しいひとに作り上げられ、正しいひとであることになる。その点においては、正義は技術知と類比的に語ることができる。ところが、正義の知については技術知と異なり、それをもつ正しいひとが正義に適った行為をすることが必然であり、不正な行為をすることが不可能なのである。ソクラテスは、知がひとのありかたをきめるものであり、ひとを知と同名なるありかたにするものであるととらえる。また、正義の知の場合には、正義に適っていない不正な行為が不可能であることが正義の「ありかた」であるととらえるのである。